



NPO 法人 日本小児がん看護学会

Japanese Society of Pediatric Oncology Nursing
— JSPON —
News Letter Vol.30



今年は夏から秋にかけて、例年にない台風や集中豪雨が続き、全国各地で大きな被害を及ぼしました。被災された皆様には、学会より心からお見舞い申し上げます。近年、自然災害が深刻化しておりますが、これからも小児がんの子どもたちやその家族が安心して治療を受けられるよう、各学会や医療施設と連携をとりながら活動していきます。

第 17 回日本小児がん看護学会学術集会のご案内

第 17 回日本小児がん看護学会学術集会を、第 61 回日本小児血液・がん学会、第 24 回がんの子どもを守る会とともに、広島コンベンションホール／広島県医師会館で開催いたします。

医療の進歩により、小児がんの治療成績は飛躍的に向上し、長期フォローアップはそれぞれのライフステージの健康課題の解決と QOL の向上をめざしています。また、子どもたちやご家族の療養のため、在宅医療、訪問看護、ホスピスなどが拡大しつつあります。そこで今回の学術集会は、「ライフスパンで支える子どもたちの夢・希望・平和」をテーマといたしました。

特別講演は、小児がん経験者である小林咲里亜氏に、「病気から子ども達から多くを得て、今がある」をテーマに、今日に至るまでのご経験をお話しいたします。教育講演は、チャイルドライフスペシャリストの藤原彩氏（広島大学病院）に、「小児がんの子どもとともに前を向いて ～成長する子どもの日常を支える～」をご講演いただきます。子どもたちが元々持っている苦しい治療や検査を乗り越える力を信じ、その力を十分に発揮できるようなかかわりのご紹介とともに、子ど

もたちの笑顔の力についてお話しいたします。シンポジウム 1「ケアをつなぐ」は、多職種や多施設の連携についての意見交換を考えています。シンポジウム 2「エンドオブライフケアのチームアプローチ」は、小児看護専門看護師、訪問看護師、緩和ケア医師、臨床心理士、作業療法士の皆様に、病院や在宅での緩和ケアと看取り、ご家族のグリーフワークについてお話しいただく予定です。小児がん看護の実践・教育・研究の向上を目指し、教育委員会は、セミナー「抗がん剤の基礎知識 ～プロトコルを理解して先を見越した看護をしよう～」を、ケア検討委員会は、ワークショップ「日常的な実践に“小児がん看護ケアガイドライン”を活用しよう」を企画しています。

2 学会合同シンポジウムは、「小児がんに対する放射線治療のメディカルスタッフの役割～最適な放射線治療チーム構築に向けて～」を、3 団体合同シンポジウムは、「小児・AYA 世代のがんと生殖医療を考える ～さまざまな選択～」を、予定しています。

一般演題につきましては口演 51 題、ポスター 22 題（合計 73 題）の登録をいただきました。この場をお借りして、ご協力を賜りました皆様に御礼申し上げます。

また今回の学術集会は、小児がん経験者や家族会の皆様など、一般の方が日本小児がん看護学会学術集会の講演やシンポジウムなどに参加されます。学術集会が、参加者の皆様の活発で有意義な意見交換の場となることを願い、紅葉に彩られた広島でお待ちしております。

第 17 回日本小児がん看護学会学術集会会長 祖父江育子
(広島大学大学院 小児看護開発学)

〔テーマ〕 「ライフスパンで支える子どもたちの夢・希望・平和」

会期 : 令和元年 11 月 14 日 (木) ～11 月 16 日 (土)

会場 : 広島コンベンションホール/広島県医師会館

参加費 : 当日受付のみ 看護師 10,000 円 (3 団体共通、すべての会場に参加可能)

〔プログラム〕

特別講演	「病気から子ども達から多くを得て、今がある」
教育講演	「小児がんの子どもとともに前を向いて ～成長する子どもの日常を支える～」
看護シンポジウム 1	「ケアをつなぐ」
看護シンポジウム 2	「エンドオブライフケアのチームアプローチ」
教育委員会セミナー	「抗がん剤の基礎知識 ～プロトコルを理解して先を見越した看護をしよう～」
ケア検討委員会ワークショップ	「日常的な実践に小児がん看護ケアガイドラインを活用しよう」
3 団体合同シンポジウム	「小児・AYA 世代のがんと生殖医療を考える ～さまざまな選択～」
2 学会合同シンポジウム	「小児がんに対する放射線治療のメディカルスタッフの役割 —最適な放射線治療チーム構築に向けて」



ベルギー病院研修&SIOP2019の報告

SIOP2019の前にベルギーにある代表的な先進的な医療施設である2つの大学病院に、12名で参加しました。今回の病院研修は、2006年にジュネーブで開催されたSIOPで出会ってから毎年SIOPで親交を深めているDr. Veronique Van De Veldeのご好意により実現し、フランダース地方にある2つの大学病院で研修をする機会を得ました。

2019年10月21日(月)は、Ghent University Hospitalにて「AYA世代のがん患者への看護」「移行期支援」「在宅での緩和ケア」について講義を受け、病院の施設見学もさせて頂きました。ベルギーではAYA世代(16歳~35歳)のがん患者が自分の病気を理解すると共に、周囲の人に伝えることを促進するためのツールボックス「JONG EK KANKER」が作られ、患者達に配布されていました。ベルギーでは18歳から徐々に成人科に移行(transfer)していくとのことでした。成人科に移行することはある1時点のことですが、病気や治療に関する



主導権を親から子どもに移行(transition)出来るように支援することが重要であり、そのために小児医療と成人医療の双方のスタッフが協働して関わっているとのことでした。

2019年10月22日(火)は、Leuven University Hospitalを訪問し、小児がん医療における多職種連携について話を聞きました。

小児がんの患者に関わっている職種として、医師・看護師・薬剤師の他に、栄養士・臨床心理士・ケアコーディネータ・ソーシャルアシスタント・臨床心理士・音楽療法士・キネジスト・エルゴセラピスト・フィジセラピスト・教員・プレイアドバイザーなどがあると知りました。



施設見学の際に、音楽療法室にてセラピストと一緒にセッションする機会があり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

今年のSIOPはフランスリヨンで開催されました。私達は、ブリュッセルからリヨンまでTGVで移動しました。全参加者が昨年の日本の参加者を越え、2600人以上になりました。日本から参加した看護師は約20名で、7題のポスター発表をしました。オープニングセレモニーでは、多くの参加者から「去年の京都は素敵だった」「去年はお疲れ様」「今年はリラックスして参加出来るね」など、声をかけて頂きとても嬉しかったです。

10月23日のEducational Dayには、在宅ケア・AYA世代の患者のがんによる倦怠感・患者ときょうだいの心理的サポートに関するセッションが開かれました。24日は、「看護師へのサポートと教育」「ケア改善のためのアプローチ」に関する発表に加え、ラウンドテーブルもありました。25日には、「子どもが症状をレポートするためのツール開発」「AYA世代の患者・サバイバーの体験」の発表と、CCI(親の会)とのジョイントセッションでは、長期フォローアップについてシンポジウムが開催されました。25日には、「環境と感染管理」「親の認識と親への教育」「補助療法」をテーマに発表がありました。



2020年はオタワ(カナダ)、2021年はハワイ(米国)、2022年はバルセロナ(スペイン)です。会員の皆様も是非SIOPに参加し、日本の実践や研究を発表し、海外の小児がん看護・医療を学んでみませんか。

(国際交流委員 小川純子)

<小児がんと予防接種>



移植や免疫不全状態にあるお子さんに対する予防接種の有効性や安全性に関するエビデンスは、きわめて少ないです。小児がんの治療の多くは、化学療法で行われており、抗がん剤は人の免疫力を下げるといわれています。特に、神経芽腫や白血病などで造血幹細胞移植を行ったお子さんや、骨髄移植を受けたお子さん、さらに肝芽腫で肝移植を受けたお子さんは、予防接種の抗体が低下してしまうため、感染症に対しては特に注意が必要となります。現在、免疫が低下したお子さんへの予防接種や感染症から守る体制を病院の医師や家族自身が気づいたところから取り組んでいます。

生活を支援していく看護師自身も、成長発達にあるこどもへの支援として、ともに取り組むことが求められています。

今後国や市でも経済的支援をどのようにするのか、ということの話し合いが行われていますが、居住地によって対応がさまざまであり、こどもや家族が安心して在宅で生活していくためには、広く情報収集していくことが求められます。

埼玉県立小児医療センター
小児がん情報室兼移植センター移植支援室
小児看護専門看護師 田村恵美

「第 16 回小児がん看護研修会」開催のご報告

8月24日 聖路加国際大学大村進・美枝子記念聖路加臨床学術センターにおいて、第16回小児がん看護研修会を開催いたしました。51名（会員32名、非会員19名）の参加がありました。今年度はメインテーマを「小児がん患者のきょうだい支援」とし、午前中は3名の講師による講演、午後はテーマ別のグループ討議を行いました。

講演の1つ目は聖路加国際病院でCLSとして活動されている三浦絵莉子氏より「小児がんのきょうだいに起こっていること」をテーマに、小児がんの子どものきょうだいの体験や日頃のきょうだい支援のポイント、きょうだい支援の具体的な活動内容についてご講演いただきました。きょうだい支援という1つのミッションに向かい多職種が協働して行うレンジャー活動（きょうだいの来院ポイントサービス、きょうだいイベント、退院時表彰状など）をお聞きし、自施設でも取り入れていきたいと感じました。2つ目はNPO法人しづたね 理事長 清田悠代氏より、「病気の子どものきょうだい支援」をテーマに、きょうだいが抱えている思いやきょうだい支援活動についてのご講演をいただきました。「きょうだい、病気の子ども、親はモビールのようにつながっている。誰か1人だけ手厚いケアがあってもそのバランスは戻らない」というお話に、家族全体をみて支援する必要性を改めて学びました。また、きょうだいの切なる思い、「10のうち1でいい。でも、1と0では全然違う」をお聞きし、病気の子どもに注目が集まる状況にあっても、きょうだいに1の支援が

届くことの大切を親御さんに伝えること、自分自身もそれを意識して活動をしたいと感じました。3つ目は、福島県立医科大学附属病院で移植コーディネーターとして活動されている安齋紀氏による「移植を受ける子どものきょうだいドナーにおける倫理的配慮」をテーマに、きょうだいをドナーとする場合の倫理的問題やきょうだいドナーへの実際の支援について講演をいただきました。きょうだいをドナーとする場合に配慮すべき点やきょうだいへの関わりの視点を学ぶことができました。

午後のグループ別討議では、私は「入院中の子どものきょうだい支援」のグループに参加をしました。それぞれの施設の中できょうだい支援の難しさやきょうだい支援に対するスタッフ間の認識の格差など、きょうだい支援の現状と課題を共有した後、午前中の講演の内容を踏まえて実践できることを検討しました。きょうだいがどのように過ごしているか話を聞くこと、きょうだいの名前や年齢を把握し、会えた時にはきょうだいを名前で呼ぶこと、来てくれてありがとう、いつも家でがんばってくれてありがとうと声をかけること等が、きょうだい支援の1つになることを参加者で共有しました。明日からのきょうだい支援を具体的に考えられる機会となりました。



小児がん看護学会 教育委員 福地 麻貴子
(埼玉県立小児医療センター 小児看護専門看護師)

CNS のまめ知識

<家族会との協働>

平成31年2月厚生労働省で検討会が実施され、新小児がん拠点病院15施設が指定されました。小児がん患者及びにその家族への支援強化を目的とし、施設要件の「小児がん患者及び家族が心の悩みや体験を語り合うための場を設けることが望ましい」から「望ましい」が削除されました。こうした時代の流れの中で、専門職として「家族会」活動の意味を考え直してみる必要があるのではないのでしょうか。

日本で小児がん患者家族会（以下、家族会）が設立されたのは、1980年代後半のことで、現在約46団体が報告されています。家族会の活動は、大きく3つあると考えます。1つは「相互支援」です。小児がんという希少疾患を体験した患者家族が、お互いの体験を語り合い、イベントなどを通して交流し、情報交換はもちろんのこと、様々な形でお互いを助け合う活動です。2つ目は「学習」です。患者家族自らが、治療や合併症について、晩期障害など自らのQOL向上のために、今何が出来るかを学び合い、知見を広げる活動と言えます。さらに、3つ目は「社会的活動」です。患者家族の生の声を世論に届ける、家族会の中でも最も重要な活動の一つだと考えます。患者家族に今何が起きているのか、リアルタイムに届けることは、当事者に寄り添った医療を提供するため最も重要なことであります。こうした家族会の活動が、実際の小児がん診療体制の確立に影響を与えていると言っても過言ではありません。

私が家族会の重要性に目覚めたのは、学会でサバイバーである患者本人とその家族の生の声を聞いた時のことです。患者家族がピアサポーターとして存在しお互いを支え合うことの重要性和その絆の強さ、永続性に感涙しました。同時に医療者ではサポートできない部分に気づき、家族会と医療者が協働することの重要性を感じました。家族会の規模や運営の方法など、その在り方は様々です。自施設の家族会の活動を意図的に支援し協働することで、患者家族の力を高めていけるのではないのでしょうか。

小児がん治療はますます進歩し、多くの子どもと家族が、がんサバイバーとして生きることになります。患者家族が医療機関に入院する期間は、その後の人生のほんの一部でしかありません。だからこそ患者家族が自らの力で、その後の人生を質高く、力強く生きていけるように、エンパワメントする必要があります。そのため自助グループである家族会の役割は大きく、家族会がその活動を維持、向上していくためには、患者家族と共に歩み寄り添うことのできる医療者の存在は欠かせません。患者家族同士が力を出し合い、高め合うことの出来る家族会の存在は、これからますます必要となると考えます。専門職として今一度「家族会」との協働について考えられたら嬉しく思います。

東海大学医学部付属病院 家族支援専門看護師

小泉織絵

**第18回日本小児がん看護学会学術集会のご案内**

2020年11月20日（金）から22日（日）にかけて、福島県郡山市の「ビッグパレットふくしま」にて、第18回日本小児がん看護学会学術集会を開催いたします。「受け継ぐ命 紡ぐ明日」をテーマに、子ども一人一人から教わることを伝え、わかち合う場となりますように、これから企画を進めて参ります。この機会に、多くの皆様にふくしまに来て、ふくしまを知り、感じていただけることを願っております。

福島県立医科大学看護学部 古橋知子

「小児がん看護師制度」相談受付の開設

第17回日本小児がん看護学会学術集会（広島コンベンションホール）で、「小児がん看護師制度」の相談受付を以下の時間でオープンいたします。申し込みの方法や内容など、質問・疑問等があればいらしてください。また研修用のe-learningを実際に見ることができます。

日時：11/15（金）13：30～15：00

11/16（土）14：00～15：00

場所：広島コンベンションホール3階控室3A

第1回 小児・AYAがん患者・経験者・家族・支援者プログラムの開催

第17回日本小児がん看護学会学術集会で小児血液疾患または小児固形がんの患児やAYA世代がん患者、家族を支援する団体運営または個人、医療従事者、自治体職員等の関係者がともに小児がん全般と関連する地域課題について話し合います。皆様のご参加をお待ちしています。

日程：11月15日（金）、16日（土）

会場：広島コンベンションホール 3階会議室3D

<http://www.c-linkage.co.jp/isphoannual/info-events.html>

お問い合わせ：isphoannual@clinkage.co.jp

※ご参加については、当日受付も可能です。本プログラム専用の受付へお越しください。

**◆日本小児がん看護学会の評議員選挙について◆**

2020年夏に学会設立以来初の選挙を行います。選挙では、評議員を選出します。評議員は4年任期（2021年1月～2024年12月）とし、評議員内の互選で理事と委員を決定します。選挙はWeb投票にて行います。詳細については総会にて説明しますので、是非総会にご参加下さい。

会費納入のお願い

日本小児がん看護学会の年度は、1月～12月となっております。2019年度の振込みがお済みでない方は、お早目をお願いいたします。

〔会費振込み先〕

郵便振替口座：00590-9-79689

名称：特定非営利活動法人 日本小児がん看護学会

国際小児脳腫瘍学会のご案内

第19回国際小児脳腫瘍学会が来年、軽井沢で開催されます。同シンポジウムは世界各国で1年おきに関わられ、日本では2006年の奈良以来14年ぶりです。

ISPNO2020では、診断、臨床試験、新規治療、基礎研究およびトランスレーショナル研究、神経放射線学、心理学、生活の質、看護、患者のケアなど、小児神経腫瘍学のほぼすべての領域をカバーした内容と、各界の臨床家、研究者が集う予定です。初日の6/21（日）午後にはNursing Sessionsが設けられます。

また、来年はパラリンピックイヤーということもあり、ファミリーデー実行委員会共催（がんの子どもを守る会と小児脳腫瘍連絡会）で手作りファミリーデーを行い、ポッチャ大会を予定しています。是非、皆さま軽井沢にお越しください。<http://ispno2020.umin.jp/>

日程：2020年6月21日（日）～6月24日（木）

会場：軽井沢プリンスホテルウエスト

<https://www.princehotels.co.jp/karuizawa-west/>

◆小児がん看護学会誌編集委員会より◆

＜第17回学術集会総会後に研究奨励賞授与式のお知らせ＞
平成26年度開始された研究奨励賞も第6回を迎え、今年度の受賞者が決定しました。研究奨励賞は、過去3年間に学会誌に掲載された論文から、毎年、選考委員による厳正な審査と、理事会での承認を経て決定されます。研究奨励賞授与式は学術集会会期中の総会后、11月15日（金）17:30～17:50に広島コンベンションホールの第4会場（大ホール3A）にて行われます。皆様ふるってご参加ください。

＜研究奨励賞第5回受賞者のお知らせ＞
平成30年度の実績は以下3名で、第16回学術集会総会后（2018年11月15日）に授与式が行われ、上別府圭子理事長より授与と選考理由の発表がされました。おめでとうございます。受賞論文を含む2018年までの学会誌は学会HPより閲覧いただけます。

◎入江巨殿、塩飽仁殿、名古屋祐子殿

（Vol.13, 17-27, 2018）

「小児がんを経験した子どもの親の心的外傷後成長を構成する要素—慢性疾患をもつ子どもの親との対比」

**日本小児がん看護学会**

理事長

上別府圭子

ニュースレター担当

東海大学医学部看護学科

井上玲子・杉村篤士

埼玉県立小児医療センター

田村恵美

〔連絡先〕

E-mail: rinoue@is.icc.u-tokai.ac.jp